



高橋余一の「生活絵巻」

05 生家



〔時計回りに〕
 檜の大木、土蔵造の離れ、つじ、鉄輪の荷車、銘木ぶんど
 梅の古木、飛騨街道、作業小屋

生家

棟に「おんどり」といって丁度昔から神社の屋根にある「カツオ木」に似たのを藁で造って棟をまたがせて、竹で押えた葺き方である

「生活絵巻」の二巻は、余一自身が住んでいた家が最初に描かれます。余一は、まず住宅の見取り図を描いています(左図)。これは、その家の造りを記録し残そうとしたことがうかがえる描き方といえます。そのあと外から見た全体の家の様子を描いています(上図)。家の前を行く大八車の人影が当時の「日常」を語ります。今では、かやぶき屋根は姿を消し、このような造りをした家は市内でも少なくなりました。私たちは、余一が残した見取り図を見ることで、かつての家の造りを知ることができます。

■ 生家見取り図

